

# 週刊新潮

4月15日号  
440円

記事の  
ラインナップを  
WEBで公開中!



えたな、と感じます

池江に続いて完全復活を！

した骨髄の細胞を点滴で移植します。自家末梢血幹細胞移植という治療法で、池江選手のように他人の骨髄の細胞を移植する「同種移植」にくらべ、自分の骨髄の細胞を移植する「自家移植」は、副作用のリスクが低いと聞きます」

ただし、よほどのことでは悩みを見せない鉄人の室伏長官が、この移植治療についてだけは、「最後の移植だけが怖いんだ」と、弱みを見せていましたと伝えました

「全力で努め」  
　免疫にかかる病気などの治療法での再発率は0%だといいます。論文によれば、こ  
　とが可能である。しかし、現状では、このまま職責を負うことは困難である。  
　たるが、このまま職責を負うことは困難である。  
　たるが、このまま職責を負うことは困難である。

「全力で努めてまいります」

ることはなさそうだが、この話からわかるように骨髄の細胞移植が必要だという先の病院関係者が言う。

「室伏さんは3月中旬、自身の骨髄の細胞を取り出す手術を受けました。『スッキリ』に出演する前だつたかと。その後、イベントをいくつかこなした後、4月半ばに再び入院する予定です。その際は、まず抗癌剤を

見ても、5日には都内のイベントに出席し、青山学院大学陸上競技部の原晋監督らと意見交換。17日には日本テレビ系の情報番組「スッキリ」に生出演し、23日には定例会見で五輪について「(選手らを)全力でサポートする」と表明。25日には福島県のJヴィレッジで行われた聖火リレーの発式に出席。そして、4月1日の訓示であった。

病気と聞かされても、にわかには信じがたいほど、旺盛に活動しているが、

いずれにせよ、室伏長官自身が病気の公表を望んでいたのであれば、それを尊重するという選択肢はなかつたのだろうか。

むろん、ここまで職務と闘病は両立している。室伏長官自身、このまま職責を全うしたいという強い意志

を持つていると推察される  
だが、そうだとしても、病  
気を抱え、過酷な治療に耐  
えながら弱みは見せず、闘  
病の事実を伏せて公務を遂  
行し続ければ、生来の身体  
がどれほど頑健であっても、  
文字通り身が持つまい。  
心配なのは、骨髄の移植

「順調なら、ゴールデンウイーク明けには完治し、退院できると聞いている」と話し、それを受けて先の脳外科医が解説する。

「この治療の場合、点滴で骨髄を移植した後、抵抗力がゼロになる。だから2週間ほど無菌室で入院するはずです。ただ、そこを乗り越えられれば完治すると思います。論文によれば、この治療法での再発率は0%だといいます」

免疫にかかる病気などで、現在、病室には大きな係者が言う。もつとも、先のスポーツ医関係者は、「

「室伏さんは元気に五輪を迎えると思いますが、免疫力の問題は少し心配です。退院後は当分の間、抵抗力が落ちるので、大勢の人がいるところを歩くのは勧められません。特にいまはコロナの問題がありますから、そこはリモートを駆使するなどして、周囲が温かく支えてあげる必要があるように思います」

が無事に終わつたのちで、抵抗力が落ちているのに、間近に迫つた五輪のためにあえて人前に出続けられ、身に危険が迫る可能性がないとは言えないようだ。そうなれば室伏長官自身ばかりか、東京五輪の開催国である日本のリスクにもつながるだろう。

特に室伏長官は、国家機関の高官で、五輪の開催準備を担う公的な重職の本丸にいる。その健康状態が国民の利益に直接影響する立場なのだから、本人が希望したのであれば、病気は公示したうえで、可能な範囲で「日本の顔」として職務を果たしてもらう。そうできれば一番よいのではなかろうか。

とはいっても、病気は高度にプライベートな問題。室伏長官本人の意思を確認すべきと考え、闘病について本人に直接尋ねた。すると、「通常通り、スポーツ庁を通してください」という返答だったのです。

「個人に関する情報であるため、回答を差し控えさせていただきます」  
とのことだったが、希望も得られた。体調不良が東京五輪に影響を与えることへの懸念に対し、室伏長官の見解を聞きたい、という問い合わせには、力強い答えが返ってきたのである。  
「これまでも公務に支障をきたさないよう努めており、今後もオリエンピック・パラリンピック東京大会の開催に向けて、関係者と一丸になつて全力で努めてまいります」  
病には負けない、これしきの病気で公務に支障をきたすことはない、という鉄人の宣言であろう。池江選手の復活は、ご難続きの五輪に花を添えるに違いない。  
それに室伏長官が統いて、東京五輪が真に成功することを祈らざるをえない。負けるな、室伏！

方がおかしくなつて、転んだりもしたために検査を受けたところ、脳腫瘍の疑いがあつたのです。すぐに開頭手術を受けると、脳腫瘍ではなく、脳原発性の悪性リンパ腫でした」と明かすのは、都内のさる病院の関係者である。くどうちあき脳神経外科クリニックの工藤千秋院長に補つてもうと、「脳リンパ腫は、MRI検査などの画像上では脳腫瘍との区別がつきづらいことがある。多くの場合、脳腫瘍だと思って手術をし、脳リンパ腫だと発覚します」また、工藤院長によると、脳リンパ腫は、脳原発性悪性リンパ腫（中枢神経系原発悪性リンパ腫）と、全身にできるリンパ腫が脳に転移した悪性リンパ腫の2種類に大別される。先の関係者によれば、室伏長官は前者だが、これはどんな病気か。**病理専門医、細胞診専門医（全国医師連盟理事）**の榎木英介氏が説明する。

「発症者は10万人に一人といわれるほど稀な病気で、実際、発生頻度は脳腫瘍の2～4%程度、脳以外で発症する悪性リンパ腫の1%未満とされます。脳にはリンパ組織が存在しませんがそれなのに悪性リンパ腫が発生する原因は明らかになつていません。発症しやすいのは45～80歳。悪性リンパ腫一般はリンパ節にできることが多く、ほかのリンパ節や内臓に転移しますが脳リンパ腫は脳を中心とする中枢神経や脊髄腔、眼球内への転移にとどまり、ほかの組織には影響を与えません。そのかわり増殖が速く、放置すれば数カ月で亡くなることもあります。中枢神経に発生するので、頭がぼんやりしたり、言語障害を伴つたりします。脳内で悪性リンパ腫の細胞が増えると脳が圧迫され、頭痛や嘔吐、痙攣や目が見えにくくなるなどの症状も報告されています」

**「最後の移植だけが怖い」**

気になるのは治癒の可能  
性だが、さる脳外科医は、  
「決して超難病というわけ  
ではありません」

と前置きして説く。

「50歳以下であればほぼ完  
治する病気です。50歳を超  
えても、65歳までなら70  
は治りますが、65歳を超  
ると危険です。高齢者は  
髄の細胞移植を受けられ  
ないからです」

幸い室伏長官は46歳だ  
ら、治療をすれば命に關

「当初は室伏さんも奥さんも『死ぬのではないか』と、かなり取り乱し、『病気を公表し、そのうえで闘病したい』という意向を示しました。しかし、医師が公表しないで治療することを勧めました。昨年末ごろまでは、メソトレキセートという抗がん剤を投与するために、入院されている期間が長かったです」

工藤院長によると、

「脳原発性悪性リンパ腫の治療は放射線治療と、メソトレキセートを投与する化

事実、昨年秋の室伏長官のスケジュールを振り返ると、たとえば、10月16日に横浜市内の中学校で部活動を観察した後は、11月29日の静岡新聞のインタビューまで、オンラインを除けば表に出でおらず、その後は大みそか、紅白歌合戦のゲスト審査員を務めるまで、公の場に出ていない。スポーツの場に出でていない。スポーツの場合は、このメソトレキセートが最も効果的だとばかりのところである。先の病院関係者が語るには、

「発性の場合、このメソトレキセートが最も効果的だとされています」